

アレクサンドル・プロハーノフ『ヘキソーゲン氏』 Александр Проханов «Господин Гексоген»

岩本和久

1. プロハーノフ氏について

アレクサンドル・プロハーノフによる『ヘキソーゲン氏』は、2002年のロシア文学における最大の話題作のひとつとなった。この右翼イデオログによるポストモダン小説は、良くも悪くも現代のロシア文学が（あるいは現代の世界文学が）抱えている様々な問題を鮮明な形で我々に突きつけている。

プロハーノフは1938年にトビリシで生まれた。彼は1960年にモスクワ航空大学を卒業した後、技師や営林署員として働きながら、執筆活動を開始する。その後、『リテラトゥールナヤ・ガゼータ(文学新聞)』の特派員としてソヴィエト連邦のあらゆる地域に赴いた他、アフガニスタン、ニカラグア、カンボジア、アンゴラ、ユーゴスラヴィアなど海外の紛争地域において取材を行う。そのような経験を通じて、彼は国家と人間、ロシアの運命についての関心を強めていったとされる。

当時、プロハーノフにとっての文学的な師となったのは、1960年代以後のソヴィエト文学を代表する作家であるトリーフォノフだった。その支持は、1972年にプロハーノフがソ連作家同盟へ加入することを可能にした。

プロハーノフは彼自身の社会的経験と時代の風潮を踏まえて、創作を行っていたようだ。1970年代には「Иду в путь мой」(1971)、「Письма из деревни」(1972)、「Время полдень」(1977)、「Вечный город」(1981)といった作品で、ソ連社会、特に工業化という問題に目を向けていたという。ソヴィエトがアフガニスタンに侵攻した後の1980年代には、「Место действия」(1980)、「Дерево в центре Кабула」(1982)、「Рисунки баталиста」(1986)といった愛国的な戦争文学を執筆するようになった。

このような愛国的な創作活動によって、彼はソヴィエト文学の成功者の道を歩むことになった。1981年のフェージン賞、1983年のレーニンスキイ・コムソモール賞、1988年の国防省賞と、彼は1980年代に様々な賞を受賞する。また、労働赤旗勲章と名誉勲章を受けてもいる。

1985年、彼はロシア共和国作家同盟書記に就任した。1989年には雑誌『ソヴェーツカヤ・リテラトゥーラ(ソヴィエト文学)』の編集長となる。しかし、彼の立場を作り上げた時代は過去のものになっていた。ペレストロイカの時代に言論の自由化や諸民族のソ連邦からの離反が進む中、彼の地位は低下していく。1990年、彼は新聞『ジェーニ(1日)』を創刊し、その編集長となった。1991年7月、体制側の作家ボンダレフや農村派の作家ラスプーチンらと連名で、彼は反民主主義のマニフェスト「人民への言葉」を『ジェーニ』に掲載している。続く8月にはクーデターを支持した。

同年12月のソ連崩壊後、10年を経た現在から見ると、このような彼の栄光と挫折の物語

は、別世界にも似たるか昔の出来事に思われなくてもいい。しかし、プロハーノフと同じ時代を過ごしたソヴィエト市民たちにとっては、彼の存在を単なる過去の遺物とみなすことは困難であろう。小説『ヘキソーゲン氏』の荒唐無稽な内容も、ロシアでは真摯に受け止められているように思える。

ソ連崩壊後のプロハーノフの思索はソヴィエトの公式的な枠組みを外れ、グロテスクな性格を強めていった。1993年、エリツィン政権下で新聞『ジェーニ』の発行が禁じられると、プロハーノフは新たに『ザーフトラ（明日）』の刊行を開始した。現在の彼はこの新聞を舞台に「反対派」（оппозиция）の論客として振舞っている。反米、反リベラリズムにして国家主義的なその思考には、ユーラシア主義やムツソリーニの影響が見られるという。『ヘキソーゲン氏』についてのインタビューに答えて、彼は次のように語っている。

「私たちはロシアで抗議する大衆を作り出さなければならない。私はこの大鍋にスキンヘッドたち、リモノフたち、コンドラチェンコフたち、抗議するイスラムを投げ入れたい」¹

「ロシアの使命はユーラシアの空間を同化し、一体化することだ」

「ロシアは巨大であり、膨大な矛盾に満ちているがゆえ、そこには常に強力な国家があらねばならない」

「（多民族国家に生きる）ロシア人の課題は、全てを自らのうちに統合することだ」

「ロシアは常に天国を建設しようとし、個人的な公正ではなく、あらゆるものための世界的な公正を志向するだろう」

「ロシアの主要な価値となるのは、超越的な認識だ」²

『ヘキソーゲン氏』の主人公ベロセリツェフはポリシェヴィズムにも正教にも等しく共感しているが、共産主義と君主制主義の双方を反リベラリズムという点において一体化するというのも、プロハーノフの思考の特徴だという。他方、彼の創作は虚実の入り混じるキッチュなものとなり、ポストモダン的な性格を強めていったようだ。『ヘキソーゲン氏』もそのような作品として理解することができるだろう。

特派員として世界の紛争地域に赴いたプロハーノフは、各地で蝶を収集した。紛争地域における蝶のコレクターというベロセリツェフの設定には、プロハーノフ自身の経験が投影されている。同じく蝶の収集家である作家ナボコフをプロハーノフは愛好しているというが、そこには趣味を同じくする者への共感や帝政時代のロシアに対するノスタルジーだけでなく、ナボコフのうちにあるポストモダン的な要素への関心も存在しているのかもしれない。君主制主義と共産主義を合体できるプロハーノフはまた、前近代的なものと近代的なものを、農村の民謡と都市の近代建築を同時に愛することができる。古い民謡を愛するプロハーノフは、同じ性格をベロセリツェフに付与している。とはいえ、『ヘキソーゲン氏』においてもっばら描かれているのは、都市再開発が進む20世紀末のモスクワの近代的な風景だ。

2. 『ヘキソーゲン氏』について

プロハーノフの小説『ヘキソーゲン氏』は、2001年秋に『ザーフトラ』紙と『ソヴェー

ツカヤ・ロシア』紙の共同出版の形で発表された。この小説は出版社「アド・マルギネム」の社長アレクサンドル・イヴァノフの関心を惹き、翌 2002 年春に同社より単行本として出版される。新聞社版とアド・マルギネム版には、文体上の手直しや「エピローグ」の加筆といった異同があるという。その後、この作品は第 2 回「ナツィオナーリヌイ・ベストセレル」(国民的ベストセラー)の受賞作となり、センセーショナルな議論を呼ぶことになった。なお、第 1 回の同賞が選考される際にも、彼の作品『夜の中を行く者たち』が候補となっていた。

『ヘキソーゲン氏』で語られるのは、エリツインの引退後にプーチンを大統領に就任させようとする陰謀劇だ。政界の大物たちは仮名で登場するが、読者はそのモデルを容易に推測することができる。「選ばれし人」(Избранник)はプーチン、「偶像」(Истукан)はエリツイン、「首相」(Премьер)はステパーシン、「アストロス」(Астрос)はグシンスキイ、「ザレツキイ」(Зарецкий)はベレゾフスキイ、「娘」(Дочь)はエリツインの娘のタチヤーナ・ジヤチェンコだ。とはいえ、この小説は実録小説では決してない。小説の陰惨な内容は、結末でプーチンが虹に変容してしまうことから明らかなように、現実の断片をモチーフとした幻想と考えるべきものだ。

小説の主人公となるのは、引退した KGB の将校ベロセリツェフだ。プロハーノフはベロセリツェフが世界各地で活躍する長編小説のシリーズを執筆しており、この小説もその 1 冊となっている。

小説のタイトルとなっている「ヘキソーゲン」とは爆薬の名称である。小説中に「ヘキソーゲン氏」という人物が登場することはない。これは爆薬の傍らで、陰謀やテロに従事している現代ロシア人を象徴した言葉と言えるだろう。

『ヘキソーゲン氏』は 5 つの部分に分けられている。

第 1 部「検事作戦」では、グレチシニコフら元 KGB の将校たちが組織している「スアヒリ作戦」に、ベロセリツェフが参加することになるいきさつが語られる。これは「選ばれし人」を指導者の座に据え、ソ連という帝国を復興させようとする陰謀だ。

「スアヒリ」という仇名を持つかつての上司アヴジェエフ將軍の葬儀に赴いたベロセリツェフは、そこでこの作戦に加わるようグレチシニコフらに要請される。その最初の標的となるのが、検事総長(モデルはスクラトフ)だ。検事総長はモスクワ市長とメディア王アストロスのために、大統領「偶像」を攻撃しているのである。グレチシニコフらは女性スキャンダルを理由に、検事総長を失脚させようとする。

準備が進められる中、ベロセリツェフは奇人ニコライのもとを訪れる。「スアヒリ」の葬儀に訪れた教会で、彼はニコライと知り合い、モスクワの地下鉄に棲む蛇についての話を聞いたのだ。この蛇はロシアを終わらせる力を持つが、レーニンの遺体が蛇からクレムリンを護っているのだという。

諜報活動で派遣された世界各地で蝶を収集していたベロセリツェフは、同じ趣味を持つ検事総長を誘き出し、雇われた女性ヴェロニカ(実はニコライの娘)とふたりきりにする。検事総長のスキャンダルは隠し撮りされ、テレビのニュースで放映される。検事総長は失脚に追い込まれ、この成果と引き換えに「選ばれし人」は FSB の長官になることを約束される。

続く第 2 部「首相作戦」においてグレチシニコフらは、チェチェン軍をダゲスタンに侵攻させることで、首相を失脚させようとする。ベロセリツェフはチェチェンの人質となった将軍シェプトゥンを解放するため、それが贖金であると知らぬまま、身代金を運搬してしまう。その結果、シェプトゥンは惨殺され、首相が人質解放を祝おうとした席にその生首が届けられる。

信頼回復を狙う首相に政商ザレツキイは、バサーエフを一旦、ダゲスタンに侵攻させた後、それを撃退するという方法を勧める。ベロセリツェフはダゲスタンに赴き、チェチェンを支持しないようダゲスタンのムスリムを説得する。そして、地獄絵図のような戦争が始まる。信頼を失った首相は、ポリショイ劇場を訪れたことを大統領に咎められる。

第 3 部は「カミュ作戦」と題されている。アストロスとザレツキイを一挙に破滅させようとするグレチシニコフは、対立していた彼らを一旦、和解させる。その後、彼は、権力を握る大統領の娘タチヤーナ・ポリソヴナに盗聴テープを聞かせ、彼女をアストロスとザレツキイから引き離す。

一方、ベロセリツェフは「光と力」を求めてレーニン廟やトロイツェ・セルギエフ修道院に向かうが、その心が癒されることはない。

モスクワ市長は新しい橋の建設を祝うパーティーを開き、有力者を集めるが、そこでは「選ばれし人」の恩人グラモフォンチクが毒殺されてしまう。こうして「選ばれし人」の地位は不動のものとなる。

しかし、ベロセリツェフはグレチシニコフから、ソ連という理想の帝国を回復することは不可能であることを告げられる。権力が人民のものになるというのは、レーニンたちが考え出した虚構に過ぎないというのだ。

この会話に絶望したベロセリツェフの目の前で、ニコライが自爆テロを敢行する。彼は蛇を倒すために、赤の広場に突入したのだ。

第 4 部「ヘキソーゲン氏」は 1999 年 9 月にモスクワで起きた住宅爆破テロを扱っている。

チェチェン人から爆破計画を教えられたベロセリツェフは、そのニュースをグレチシニコフに告げるが、計画の共謀者であるグレチシニコフは取り合わない。

途方に暮れたベロセリツェフの前にカダチキンが現れ、「KGB 結社」(つまり「スアヒリ作戦」)と「GRU 結社」というふたつの秘密組織が、現在ではグローバリズムに対するそれぞれの態度にもとづき、「選ばれし人」のために争っていることを教える。「KGB 結社」はフルシチョフ体制と戦うために作られた組織でアンドロポフが率いていたもの、「GRU 結社」はスターリンがトロツキストと戦うために作ったものだという。

ベロセリツェフは「スアヒリ作戦」の仲間のコペイコを利用して刑務所病院に潜入し、ヴェロニカと共にニコライの最期を看取る。アストロスやザレツキイも同じ場所に収容されているが、アストロスは自殺し、ザレツキイは病死する。

ベロセリツェフは住宅爆破を阻止しようと、ニコライのもとで知り合ったセリョーガと共にグレチシニコフたちを追跡するが、逆にグレチシニコフたちの罠に陥ってしまう。その結果、セリョーガは殺され、ベロセリツェフは捕われてしまう。彼は爆破される建物に

隣接する屋根の上に縛り付けられ、至近距離で爆破テロを目撃することになる。

第5部は「飛行機ロシア」と題されている。ベロセリツェフはテロで傷ついた体を入院して癒した後、プスコフに旅立つ。プスコフで彼は民謡を愛する若い娘と知り合い、しばらく幸福な時を過ごす。

しかし、彼の前に再びグレチニコフが現れ、同行を促す。「選ばれし人」と共にソチへ行くというのだ。グレチニコフらと共にモスクワの空港に戻ったベロセリツェフは、そこでヴェロニカに再会する。彼女は看護兵としてチェチェンに向かうのだという。そこへ不意にカダチキンが現れ、ベロセリツェフを空港から連れ出す。「選ばれし人」を乗せた飛行機がベロセリツェフの頭上を飛び去る。しかし、続けて離陸したグレチニコフたちの飛行機は墜落して、爆発してしまう。

エピローグは機内の「選ばれし人」を描いている。彼はパイロットたちを追い出して、1人操縦席でくつろぐ。しかし、パイロットたちが操縦室に戻った時に彼の姿はなく、ただガラスの上に虹色の光だけが残っている。

3. 21世紀の文学が、それとも...

20世紀末にモスクワは大きく変容した。ソローキンがシナリオを執筆した映画『モスクワ』は、そんな1990年代のモスクワ風景をくすんだ色彩のうちに神話化しようとした作品だった。他方、『ヘキソーゲン氏』は映画『モスクワ』よりもはるかに力強い、粗暴ですらある手法で近過去のモスクワに接近しようとしている。

プロハーノフ自身は『ヘキソーゲン氏』について、「これは社会的意識の中に定着した神話を研究しようとした試みである」と語っている。彼の言葉によれば、それは「赤い帝国と結びついたソヴィエトの神話、正教的アナキズム的なロシアの白い神話、偉大なフリーメーソンの陰謀についての神話」であり、「特殊部隊は全てを知っており、陰謀を遂行ことができ、歴史の歩みを変更できる」という特殊部隊についての神話であり、悲惨な世界の中にも、たとえば牢獄の中にも「自らの庭、自らの恋人、自らの星」が存在するという「個人的な救済についての神話」だ³。

この小説はエリツィン陣営と検事総長の対立、ダゲスタンでの紛争、ビル爆破テロといった、エリツィン時代末期のモスクワで起こったエピソードを扱っている。また、政財界におけるスターたちと、彼らが織り成す権力闘争が、グロテスクに戯画化されている。このような現代社会のアイロニカルな描写と並んで、そこではまた、ソヴィエト文化やロシア文化の神話化も図られている。ベロセリツェフは農村に伝わる古い民謡に安らぎを覚える。レーニンの遺体を管理しているドクトル・ミョールトヴィフは、フョードロフの影響下であらゆる死者の復活を夢想する。ベロセリツェフはひそかに運営されてきたスターリン廟の存在を夢想する。奇人ニコライは、モスクワの地下鉄路線に棲み付いた蛇を退治するために、赤の広場に突入しようとする。このエピソード自体も実際の事件をモデルとしているという⁴。

神話化の対象であるロシアという空間への関心について、プロハーノフは次のように語っている。

「そのように巨大な国家という身体，そのような『国家』という惑星の存在をメタフィジカルに体験することで，それを文学において，言葉において記録したいという欲求を私は感じるようになった。国家の肖像を描きたくなっただ」⁵

こうした国家への関心は一方で，自己愛的なものと言えるかもしれない。誇大化に失敗した自己への愛を国家という偉大な像に投影することで，ファシズムが成立するというのはいささか退屈な議論のようだが，自己愛的な投影がこの小説の原理となっていることは否定できない。蝶と民謡を愛するペロセリツェフには，プロハーノフ自身が投影されている。そして，読者はこのペロセリツェフの視点に自らを投影し，自己保存を意識せざるを得ない危険な陰謀に参加しなければならない。

しかし，この小説は国家を深刻に美化するものではなく，現在のロシアをポップな形で戯画化したものだ。文学よりもコンピューター・ゲームに対して親近感を覚える読者ならば，『ヘキソーゲン氏』はシミュレーション・ゲームのようだと感じるかもしれない。ロール・プレイング・ゲームの空間では，状況の変化と命令の体系を操作することで，ゴールへの接近が図られる。グレチニコフの命令に従いながら，プーチンというゴールを目指すこの小説は，ゲームという命令のシステムが物語というシステムにいかにも似ているかを改めて教えてくれるだろう。

この小説は閉じた総体を思考している点においても，シミュレーション・ゲームに似ている。小説の世界が描く「ロシア」という世界は，グローバリズムの波に洗われているようでありながら，実のところ国家の領域内で閉ざされた劇場的なシステムとして表象されている。株価や為替レートが象徴するグローバルな経済ではなく，閉じた集団の中における人間関係がゲームの行方を左右しているのだ。そのような閉ざされた空間には 20 世紀末に現実のロシアで起こった様々な事件が，全体として組み込まれている。小説の世界は 20 世紀末のロシアという空間を模倣しながら，ひとつの閉ざされた総体的な空間を作り出しているのだ。そこではコンピューター・ゲームに共通する軽さと，ソヴィエトという閉じたシステムへの郷愁とが混在している。

歴史のフェイクを作り出そうとするこの小説には，ペレーヴィン『チャパーエフと空虚』や『ジェネレーション P』，ソロキン『青い脂肪』といったポストモダン小説との関係を指摘できるかもしれない。しかし，これら芸術的，現代的なスタイルの作品とは異なり，『ヘキソーゲン氏』ははるかに俗悪なテキストとすることができる。それは大衆を志向した小説に特徴的な古典的な要素，すなわち語り手による冗長な説明や，登場人物たちの長い会話，それを通じて示される深刻を装った思想に溢れたものだ。ある批評がこの小説の文体の完成度を賞賛する一方で⁶，別の批評はそれがソヴィエト文学の反復にすぎず，新しいものが何もないことを批判している⁷。とはいえ，このようなネガティブな特徴は，むしろ，テキストのキッチュな魅力を強めていると言えるだろう。

キッチュなテキストである『ヘキソーゲン氏』は，したがって退屈なテキストではない。それは厳格に完成された総体への志向と，弛緩した俗悪さへの志向の間で揺れ動く，繊細なテキストなのである。

現実の政治的陰謀劇を再現するという手法も，やはり俗悪な印象を抱かせるものだ。し

かし、それはポストモダン文学に特徴的な軽さと空虚さを伴いつつ表現されているために、完全な凡庸さに陥ることがない。また、小説の前景に出されるのは陰謀の物語ではなく、神話化されたロシアを示す数々のイメージである。陰謀の物語は小説をささえる骨組みでしかなく、ほとんどゲームのシナリオと化している。政治的陰謀劇の主役たちは戯画化され、後景に退いている。もっとも後景に退き、ほとんど断片的なイメージと化しているのが、物語の主役であるべき「選ばれし人」(プーチン)だ。彼は小説にほとんど登場せず、登場した場合にもほとんど言葉を発しない。そして、イルカや虹という奇妙な隠喩を与えられることによって、謎めいたイメージをさらに強めている。国家の陰謀劇を暴き出し、戯画化しようとしているかのようなこの小説は、実のところ、国家に奥行きを作り出し、その神秘化を行っている。

現実には起こった事件を描くこの小説は、小説自体が事件となることによって、俗悪さと神秘性をいっそう強めていったかのようなのだ。この小説のプロジェクトは、それ自体がひとつの陰謀の物語なのではないか、とさえ感じさせるものになったのである。退屈な大衆小説として誰も注目を払わなかったかもしれないこの小説は、現代文学の市場に自らの場を切り開くことに見事な成功を収めていった。現代思想やポストモダン文学の紹介といった「知的」な出版社である「アド・マルギネム」が刊行しなければ、この小説は単なる娯楽小説とみなされるにとどまっていたかもしれない。また、「ナツィオナーリヌイ・ベストセレル」を受賞し、1万ドルの賞金を得ることがなければ、大きな議論を呼ぶこともなかったであろう。

プロハーノフは絵画展やインターネットも利用しながら、小説にイベント的な性質を与えていった。彼は小説の刊行に続けて、『ヘキソーゲン氏』をモチーフにした絵画展を開催している。また、インターネット上に『ヘキソーゲン氏』についてのサイトを開設し、小説のテキストやこの絵画展に出品した絵画の他、この小説をめぐるロシアのメディアに掲載された報道や批評、インタビューを可能な限り収集している。

検閲の厳しいソ連時代には、サミズダートという地下出版の実践があった。また、ロシアでは現在もなお、「作家の夕べ」のようなイベントが盛んに催されている。そのような伝統を持つロシア文学の世界においては、小説の流通にイベント性が加わるのも自然な成り行きかもしれない。しかし、この作品を取り巻くイベント的な傾向は、そこに何かの意味が見出せるのではないかと、という期待を観察する人間にとりわけ抱かせるものである。

とはいうものの、「ナツィオナーリヌイ・ベストセレル」賞をめぐる盛んになされている議論は、退屈なものでしかない。多くの批判が小説の形式の保守性、非芸術性を指摘し、また、反リベラリズムの国家主義者である作者のイデオロギー的立場を攻撃している。大衆を教育するために作られたという、あたかも「社会主義リアリズム」の再現であるかのようなこの賞の対象として、『ヘキソーゲン氏』というイデオロギー的に危険なテキストがふさわしいものではないことは確かだろう⁸。もっとも端的な批判はオリガ・スラヴニコヴァによるものだ⁹。彼女は「絶対的に文学の外側にある、俗悪さと悪趣味を凝集したもの」とこの小説を規定しながら、同時にそれがベストセラー賞を受賞するよう望むと語っている。評価の難しい曖昧な俗物ではなく端的な悪が賞を獲得することで、賞取りレースという「文学周辺の物語」の欺瞞が露呈し、それが終焉を迎えることこそが、彼女にとっての望まし

い結末なのだ。この純粹で良心的な主張はしかし同時に、繊細な感受性と高いリテラシー能力を持つ者だけが享受することのできる、文学という制度のエリート性、排他性を示すものでもある。たとえ大衆文学や童話であれ、一定の識字能力、想像力、論理的思考力がなければ受容は不可能だし、そうした知的能力は必ずしも全ての人間に所有されているものではない。であるならば、排除された者たちの発する無気味な脅迫や幼稚な訴えが「文学の外側」という空白地帯に響き合うことになるのも、また必然の結果と言えるだろう。

芸術や民主主義を無前提に善とみなしながら、伝統的な基準に照らすことで『ヘキソーゲン氏』の醜悪さを語る。あるいは、反グローバリズムや右傾化の動きを、ただ憂慮すること。そのような行為にとどまっているのであれば、『ヘキソーゲン氏』が文学であるか否かという議論も、そのイデオロギー的な危険さを問う議論も、それがいかに緊急の課題であったとしても空疎なものにならざるを得ない。消費社会という制度はそのような議論を利用しながら、無数の「プロハーノフ氏」たちの陰謀を進めていくはずである。

注

本稿の執筆にあたっては、2002年にアド・マルギネム社から刊行された版の他、この小説を主題としたインターネットのサイト、および『20世紀ロシア作家事典』の「プロハーノフ」の項を参照した。

Александр Проханов. Господин Гексоген. М., Ad Marginem, 2002.

<http://www.gekosogen.ru/>

Русские писатели 20 века. М., Научная издательство «Большая российская энциклопедия», 2000. С.577-579

¹ *Борис Войцеховский. Писатель-патриот Александр Проханов: Хочу бросить в котел борьбы с режимом и скинхедов, и лимоновцев// Комсомольская правда. 24.04.2002.*

² *Владимир Бондаренко. Я пишу портрет государства// Книга «Дети». 2001.*

³ *Борис Войцеховский. Писатель-патриот Александр Проханов.*

⁴ *Любовь Хоботова. Человека Человеком сделал заговор, а не труд// Гудок. 06.04.2002.*

⁵ *Владимир Бондаренко. Я пишу портрет государства.*

⁶ *Владимир Бондаренко. Прохановский прорыв// Советская Россия. 27.04.2002.*

⁷ *Петр Алешковский. Впечатления недели// Общая газета. 11-17.04.2002.*

⁸ 「ナツィオナーリヌイ・ベストセレル」については、毛利公美「ビールとロシア文学の現在」『早稲田文学』2001年9月号、60-67頁を参照。

⁹ *Ольга Славникова. Я – одинокий человек в литературе// Русский журнал. 28.05.2002.*